ふくしまイレブンとは、福島県の多彩な農林水産物を代表する生産量が全国上位の１１品目です。毎月おいしいアスリートを紹介します。

バックナンバーが読める！
HPはこちら!!!

新米キャプテン物語

ふくしまイレブン　背番号１０番　米

試合は、もう始まろうとしていた。

俺はフィールドに向かう通路に立ち止まり、静かに目を閉じた。ドクン、ドクンと心臓の音だけが響いている。真っ黒な、闇。そこに一つ、また一つと、影が現れる。

牛（GK）、そこにいるか。お前なら、どんな球でも止められる。トマト（DF）、相変わらず鼻息が荒い奴だ。鉄壁の守りを見せてくれ。もも（MF）、試合だっていうのに、ただただサッカーが好きっていう満面の笑みだな。お前はそれでいい。きゅうり（FW）、かすかなチャンスも、お前の確実な攻めでとらえて、俺にサインをくれ。

向こうから、ボールがまわってくる。いいパスだ。俺は、走る。全速力でゴールに向かう。敵の頭上をボールが宙に浮かんで、最高のタイミングで、冷静に俺の足がボールをとらえる。そして、力強く、激しく、至極のゴール。俺は、大歓声のなか、フィールドを駆け回っている。

その時、大歓声の中から突然声がする。

「稲刈るから手伝え～。」

俺は、はっとして振り返る。すると、そこには黄金色の田んぼが青空の下一面に広がっている。誰も、いない。

「やだよう、もう。」

小学二年生ぐらいの少年が、黄金色の波の向こうから応える。少年は、顔を真っ黒にしてサッカーボールを抱えている。あの少年は、俺だ。

「いいから、早くしろ～。」

親父の声が、さらに俺を呼ぶ。

そうだ。俺は一日中サッカーがしていたくて、田んぼの手伝いからいつも逃げ回っていた。幼い頃、よく稲の影に身を潜めて、親父が立ち去るのを待ったものだ。

米作り以外何も興味を示さない親父だったが、ある日テレビの影響で哲学書を読み始めた。にわか哲学者の親父は、食卓を囲むと、毎晩同じ内容の講義を繰り返した。

「いいか。米粒というのは、互いに支え合っているんだ。米粒ひとつでは、腹は満たされない。かといって、その一粒をおろそかにすれば、茶碗をごはんで満たすことはできない。この粒がここにあるためには、この隣の粒はその隣になくてはならない粒で、その隣の米粒はまさにそこになければ、その隣の粒が…。まあ、とにかくだ。キェルケゴール先生の言いたいことはそういうことだ。」

発言がこんがらがり、もつれ始めると、親父は最後に必ずこう言った。

「この世界には、何万何億の人がいる。その中のたった一人が、お前だ。お前も米粒と同じように、他者と支え合ってそこに存在しているんだ。必然的に。」

そして、極めつけは、こうだ。

「そうか！お前は米粒だったか！」

歓声が、再び聞こえてくる。俺は、ゆっくりと目を開ける。

フィールドから、「イレブン！イレブン！」とコールが鳴り響く。俺は、そのコールを聞いて、胸が燃えるように熱くなるのを感じる。

「また格好つけてるな？さ、行くぜ。」

後ろから、背中をぽんと叩いた牛がフィールドに出て行く。

「いっちょ、かましますか！」

調子のいいりんどう（MF）が、足取り軽く牛を追い越す。

「言っておくが、お前だけいい思いさせないぜ。」

「今日の俺は、一段とクチバシ鋭いぜ。」

脇に立つ地鶏兄弟（FW）の挑発的な眼差しが、俺の闘争心を煽る。

福島には本当の空がある、と誰かが言ったらしいが、開かれたドアの向こうに見える空が、今日はひときわ青い。俺は思う。必然的に、ここにいる、と。

さあ、試合を始めよう。

ベンチから立ち上がると、俺は歓声の迎えるフィールドへと走り出した。

米づくりにとって、7月から9月はとても大事。この時期の福島県は、日中暑く夜は涼しく、この気温の差がおいしいお米をつくります。コシヒカリはもちろん、新たに県オリジナル米としてデビューした「天のつぶ」など、おかずそっちのけでついついご飯ばかりに手が出てしまう･･･、まさに「おかずいらず」のご飯。それが“ふっくら”ふくしま米。

米

ふくしまイレブン販売促進協議会